

# ぷれみあむ みにっつ

## 第7集

携帯電話を回収せよ！  
の巻

☆ shiroa ☆

俺たちは車に乗り、会社へ向かった。五時を過ぎると退社の時間帯になり、隣の車の下に捨て置いた携帯も何かの拍子に踏まれて粉々になるかも知れない。まだこの時間なら何事も無いはずだ。

午後になれば流石に上司もオフィスに入っている。外でぼけ一つと立っているということは滅多にない。午前会社に行った時ほど大変では無いはずだ。

「しかし驚いた！ 雲運運団と、朝真会館ってふたつの組織が絡んでたのね。余計にワケがわからなくなるわけよ」

「パンダマンはパンダマンでたくらんで動いてたし、カエルとハチマキはまた裏切り者として動いてたし。こんなの推理で理解しろっていうほうがおかしいわよっ！」

本当に、頭がこんがらがりそうだ。できればもう、登場人物は増えて欲しくない。ややこしい話は抜きにして欲しい。

「もし、もしもよ。宝くじを取り返しに行くことになって、パンダマンがすでに雲運運団を裏切り逃亡してたらどうする？」

「そういうことも有りうるね。そもそも弁慶は雲運運団とは関係ないみたいだもんね。けど、宝くじを手に入れました、逃げましたじゃ、今度はパンダマンが雲運運団から追われることになるよ。パンダマンはもっと利口……いや、狡賢そうな気がする。パンダマンの目的が二億円を単純に手に入れるだけなら、昨夜カエルたちが宝くじを奪う前に、行動できたはずだし。幹部らしいからね」

「こればかりは蓋を開けてみないと分からないわね」

そうなのだ。まだまだ全ての謎が明かされたワケでは無い。ミュウちゃんはカエルたちとの話の中で、パンダマンは宝くじを一人占めするのが目的じゃないかと言ったが、あくまで可能性のひとつに過ぎない。

うう、熱が出そうだ。

「ハヤトの脳みそはチンパンジーくらいだから、あんまり考えると知恵熱がでちゃうわよ」

ミュウちゃんがぼそりと見透かしたかのようなことを言った。

「ひで一なあ。ミュウちゃんの例え。俺、落ち込んじゃうぜ」

ミュウちゃんはにんまりと笑った。

「ハヤトが落ち込むのを見ると、スカッとするのよね」

あんだ、いじめっ子かよ！

と、人知れず俺は心の中でツッコんだ。

会社に近づいた。俺は午前に停めていた場所に再び車を止め、ミュウちゃんに車に待っているように伝え、降りた。

駐車場の入口に、人気がないことを確認しようと、俺は角から少し顔を出して覗いた。こうい

う覗き方をする時って、知らず知らずのうちに鼻の下がのびたりするので注意が必要だ。

角から覗くと、そこには上司の姿があった。午後三時の日差しは、上司の頭を鈍く照らしていた。

上司は屈みこみ、駐車場の雑草をむしっていた。

「げっ、なんでよりによって今日あんなことしてるんだよ。俺が休みだからか？」

駐車場に雑草が生えてくると、上司はよく俺に除草して来い、と命令した。俺ははじめて言われた時、「そんな趣味は無いです」と答えたのを憶えている。女装と勘違いしたのだ。

俺は車に戻り、ミユウちゃんに状況を報告した。するとミユウちゃんは「あたしの出番ね！」と言って車から降りた。

「ハヤト、またあたしがコンビニに引きつけとくから、その間に携帯を回収しといてね」

そういうとミユウちゃんはさっさと行ってしまった。大丈夫だろうか。おんなじような手がまた通じるものだろうか？

「おじさま、さっきはありがとう」

「おお、今朝の子か。こんにちは」

「おじさまセンスいいのね！ おいしかったよ！ もうすぐおやつの時間だけど、何かおススメのデザートがあったら、おせーて下さい」

「そうだなあ。今度はさっぱり系がいいだろうなあ。おすすめは柚子風味のゼリーだな。和心シリーズ第8弾のヤツだ」

「へえ、くわしいんですね。でもあたし一人で行っても商品見つけるの下手なんですよなあ」

「ああ、分かる分かる。コーナーは合ってるはずなのになかなか見つけれなくて、店員に聞くのもなんだかなあって思って、結局違うの買うんだよね」

「そうそう」

「よし、おじさんもそろそろ休憩いれるところだったから、一緒に行って教えてあげよう」

「ありがとうございます！ ついてきまーす！」

見事に通じたよ！ しかしあのスケベ上司、今度入社したときは昼寝の合間に靴の中に画鋏を入れて嫌がらせしてやろう。なんかまた腹が立ってきた。

上司とミユウちゃんの姿が見えなくなったところで、俺は携帯電話を捨てた場所に素早く移動した。車を停めていた場所の隣。車の下にぽいと投げ捨てた。俺はしゃがんで車の下に腕を突っ込み探してみたが、見つからない。少し焦った。間違いなくこの場所にあった。車も同じ、矢口先輩の車。動いた様子もない。じゃ、車の下にあるはず。俺は嫌だったが砂利の上に仰向けになり、車の下を覗きこんだ。

雑草が邪魔でいまいち見えない。俺は雑草をのけながら手早く探した。……あった！ 俺はスマートフォンを掴み、立ち上がるとすぐに傷を確認した。

「くそっ！」

やはり、画面の表面に擦り傷ができていた。しかし落胆している暇はない。俺は車に素早く

戻り、電話をかけた。

ぷるるる、ぷるるる。数度、呼び出し音になる。そして、つながった。

「はい、もしもし」

特別加工された声では無かった。

「あ、あのう、パンダマンさんっすか」

「なんだ、お前か。もうお前には用はない。これ以上首を突っ込むと怪我をすることになる、もう掛けてくるな」

そしてパンダマンは電話をブツリと切った。

これで俺の疑念は確信に変わった。

ミユウちゃんが楽しそうな顔で帰って来た。

「やっほう、またおごってもらっちゃった」

ミユウちゃんは車に乗り込み、嬉しそうに戦利品を俺に見せようとした。が、そこで動作が凍りついた。俺のただならぬ雰囲気を感じたのだろう。

「……ハヤト、どうしたの？ ちょっと怖いよ」

「うん、ごめん。ミユウちゃんはデザート食べてて」

俺は車を動かした。行先はすでに決まっている。

「ねえ、どうしたの？ どこに向かうの？」

「雲運運団の事務所に向かう。そして、宝くじを取り戻す」

ミユウちゃんは眉間にしわを寄せ、口を尖らせて言った。

「ねえどうということ?! 携帯はあったわけ? もしかして見つからなくて怒ってるの?」

「ごめん、少し静かにしてもらいたいんだ」

もう、気軽に笑える気分ではなくなった。いろいろ考えたいこともある。

「携帯は見つかったんだ。そして確認しようと思ってたことがあって、確認した。そしたら思った通りで……。俺、それについてちょっと静かに考えたいんだ。とりあえず宝くじは取り返す。そこまではいいけど、その後のことも考えないと」

「わかった。じゃ、何も聞かない。けど、相棒に隠しごととしてたら、一緒に悩めないんだからね」

そしてミユウちゃんは本日もっとも優しい声でこう言った。

「ハヤトの整理がついて、落ち着いたら。あたしにもわかるように説明してね」

その言葉を聞いて少し目頭が熱くなった。

「ありがとう。俺もミユウちゃんに隠しごとなんてするつもりはない。多分、そう遠くない間に整理つけられると思う。そしたら、説明するから」

ミユウちゃんは静かに肯いた。

雲運運団の事務所は俺の住んでいるアパートから近い。俺は自分のアパートの駐車場に車を停めて降りた。

商店街は駅から東側、幹線道路沿いにあり、ほとんどシャッターが下りて寂れている。そこから裏路地に入ったところに雑居ビルがあり、その中に雲運運団の事務所があるらしい。歩いて十分あれば着くだろう。

ほとんど車がないと生活できない地域柄なのもあり、道を歩いていても歩行者に会うことも少ない。

シャッター通りに出たところで妙な魚臭いにおいが漂ってきた。

「ねえ、なんか臭わない？」

ミユウちゃんは顔をしかめて言った。

「この臭い、もしかしてカエルが言っていたサカナのことかな？」

「確かに魚臭いけど……」

「あれだよ、朝真会館のサカナだよ！ サカナの追跡ってやつ。あいつが傍にいるんじゃないかな」

朝真会館は雲運運団と違い、殺し屋集団とのことだ。諜報部だからあまり武闘派では無いのかも知れないが、仮にも空手を習っている門下生ならば、戦うことになれば敵わないかも知れない。

「もしサカナに遭遇したら、ミユウちゃんはなるべく遠くに行って、何かあったら逃げてね」

俺はポケットの中に手を入れ、ドリアン香水を握りしめた。

辺りを警戒しながら歩く。臭いがするくらいだからそう遠くはないだろう。少し先に左折できる細い路地がある。もしかしたらその辺にいるのかも知れない。

「なあお前、なんでカエルマンの臭いがするんだ？」

ぽんと肩を叩かれた。俺はびっくりして思わずとびあがり、五ミリほど宙に浮いたと思う。前に気をとられたが、すでにこちらが追跡されていたようだ。気が付いたらミユウちゃんは随分遠くの電信柱の影から俺を見ていた。

……先に気付いて逃げてたのね。

まあその方が俺としては安心だ。

俺は勇気を出し、なるべく二枚目の声で言った。

「それは、お前をおびき寄せるためさ！」

俺は振り向きざまドリアン香水の蓋を開けながら、ポケットから取り出した。嗅覚が鋭敏なのは本当なのだろう。俺がその強烈な臭いに辟易する前に、サカナはあきらかに顔をしかめた。

左右の目が異様に広く、トレーナー姿のサカナはとても強そうに見えない。サカナは鼻をつまみ、俺を抑えつけようとするが、遅い！ 俺はドリアン香水をサカナの服にぶちまけた。

「どうだ、これでお前の鼻はもう利くまい。そのトレーナーの生地がドリアンの臭いを吸い込み尽くし、三日三晩お前は臭いで悶絶するのだ！ はっはっは！」

サカナは涙目を浮かべ、「ちくしょう、これで追跡が振り切れたと思ったら大間違いだからな！ この町には俺たち門下生がたくさんいる。お前の面は割れている。必ず宝くじは取り戻してやるからな！」と吐いた。あまりに必死にいうものだから、笑いを堪えるのが大変だった。

よし、勝ったな。

「残念。もう俺のところには宝くじはないんだよ！ 雲運運団の手に戻っているはずさ。もう俺を追っても素寒貧だかんねえ」

俺は嫌味たっぷりに言ってやった。

「なにい！ では雲運運団を攻めないといけないじゃないか！ ちくしょう、ともかく退散だ。作戦を練り直さねば」

そう言ってサカナは立ち去った。

「すっごーい！ やるじゃない！」

五メートル離れてミユウちゃんは俺を誉めてくれた。たぶん少しドリアン香水が俺の手にかかったので、その臭いが臭うのだろう。

「たまにはやるだろ？ ほれなおしたろ？」

「うーん、この臭いがなければ、それもあつたかもお」

惜しい。実に惜しすぎる展開だ。

「ま、ともかく俺もこの臭い我慢ならないから手を洗ってくるよ」

「わかった、早く行ってきてね」

俺は近くのコンビニでトイレを借り、必死で手を洗った。たっぷり石鹸を使い、手を洗ったおかげでなんとか臭いは薄らいだが、まだ手を鼻に近づけると独特のドリアンの臭いが残っている。まあ、これくらいは仕方がないか。

俺はキスマントを買ってコンビニを出た。

「作戦大成功だったね！」

ようやくミユウちゃんは一メートルくらいの距離まで近づいてくれるようになった。

「ほんと、まんまとよくハマってくれたよ。ちょっち気持ち悪かったけど、大成功だったね」

俺はサカナを混乱させる為、カエルと自分のシャツを交換しておいたのだ。俺もカエルも朝から走り、汗だくになっていた。シャツには当然自分たちの汗臭い臭いが染み付いている。これを交換して着ることで、俺とカエルの臭いがする場所が二か所となり、サカナにはどちらがどちらか特定できなくなる。

となれば、宝くじを持っていると思われる俺を追うために、二か所のうちどちらが本物かを自ら確認する必要があるわけだ。もちろん手下を派遣する可能性もあるが、ここは俺のアパートの近くだ。サカナは俺のジャケットの臭いを嗅ぎ、タコヤキを追跡させた。ゴミ箱にジャケットを捨て、それをカエルたちが拾う。そのあとすぐにサカナが俺の臭いを確認していたからできた芸当だろう。あれだけ早く行動が起こせたということは、サカナは俺の近所に住んでいるか、拠点にしているだろうと予測できる。

すぐ近くに俺かカエルか分からない臭いがあるのなら、手下ではなく、サカナ自ら探りにくる可能性が高いだろう。

俺、今日は冴えてる！

「よし！ これでサカナの追跡は終わった。安全が確保できた！ では雲運運団の事務所へ向かう！」

俺たちは裏路地に入り、雲運運団の事務所へ向かった。

……。

「ところでミユウちゃん、なんでさっききあんなに遠くに逃げてたの？」

「だって、へんな人が近づいてたから。臭かったし」

「教えてくれても良かったのに～。ま、いいんだけどさ。ミユウちゃんが安全だったら……」

続く！

あとがき？ 次回予告？ ひとりごと？

---

しろあです。

物語は後半戦ということで、逃げの話から攻めの話へと転向します。

そこで表紙のカラーを変えました。

これからの寒い冬にぴったりの温かい色合いをお楽しみください。

さて。お話はいよいよ込み入ってきました。

雲運運団と、朝真会館。パンダマンを代表する、それぞれのキャラクターの立ち位置。

前回でカエルが語ったことのおさらいがこの度入ってますが、よくここをおさえていただくと、今後の展開が面白くなってきます。

今回のみどころは、なんといってもミユウちゃんじゃないでしょうか。

上司をはぐらかす小悪魔的なミユウちゃん。

ハヤトを突っ込む、連れないミユウちゃん。

そんなミユウちゃんが、はじめて女の子らしいというか、しおらしいというか。

かわいいところ、あるやん！ と思えるシーンが出てきます。

やっぱり、ハヤトが気になるんだね！ って優しく見守って上げてください。

この二人の微妙な関係もラストまで注目いただきたいポイントです。

次回はヒッチコックで云えば「裏窓」的なネタ。

ドキドキわくわくが満載ですよ。場合によっては雲運運団、事務所へ突入！ までエピソードをいれられるかも知れません。それはこれから検討しようと思います。

お楽しみに！